

板書画像や振り返りなどの学習履歴を蓄積し、 個に応じた指導や次の学びにつなげる

福岡県朝倉郡 ^{とうほう}東峰村 立小中一貫校東峰学園

福岡県朝倉郡東峰村は、2020～2022年度までの3か年にわたって、福岡県重点課題研究指定・委嘱地域として「学びの個別最適化を実現する教育活動」に取り組んでいる。東峰村唯一の小・中学校である立小中一貫校東峰学園では、1人1台端末を活用して、1年生から9年生（中学3年生）までの全児童生徒が、すべての授業の学習履歴を「TOHOスタディ・ログ」として端末に蓄積。「指導の個別化」と「学習の個性化」に役立っている。

東峰村立 東峰学園 プロフィール

◎「郷土を愛し、豊かな人間性と未来を切り拓く力を身に付けた子どもの育成」を学校教育目標に掲げる。粘り強く考え自分の学びを振り返ることができる力、自分の良さに気づき、仲間とつながる力、健やかな体で困難を乗り越え、進路を実現する力の育成に取り組む。

開校 2011（平成23）年
校長 梶原秀昭先生
児童生徒数 小学生85人、中学生41人
教員数 小学校15人、中学校16人
学級数 12学級（うち特別支援学級3）

振り返りなどのスタディ・ログを 「自分BOX」に毎時保存

研究指定を受けた「学びの個別最適化」の実現に取り組む福岡県東峰村立東峰学園。「自ら学びを創り出す子ども」の育成に向けて、個別最適な学びを推進するために、3つの視点で研究実践を進めている（図1）。中でも中心的役割を担うのが、授業の内容と振り返りなどの学習履歴を、教科・領域ごとの「自分BOX」に蓄積していく「TOHOスタディ・ログ」だ（図2）。

すべての子どもは、毎時の授業の最後に、黒板全体の板書をタブレット端末で撮影する。その画像データは、自身の振り返りとともに「TOHOスタディ・ログ」として授業支援ソフトに保存する。振り返りの観点は、

- ①分かった・できた（または、分からなかった・できなかった）
- ②このように考えたらできた（または、ここが考えられなかった）
- ③次は新しくこれを学びたい（または、もう一度やりたい）

の3つだ。3年生から9年生はタブレット端末に直接入力する。振り返りを自分の言葉で表現することが難しい1年生は◎、○、△の選択式で振り返り（P.7写真6参照）、キーボード入力に不慣れな2年生はノートに振り返りの内容を手書きしたものを、タブレット端末で撮影する。また、授業の途中に参照した資料や、自分たちの活動を撮影した動画なども一緒に保存している。

全学年ですべての授業を子ども自身が振り返ることで、「学びのよさ」を自覚したり、「次の学び」を自ら創り出したりすることができるようになったと、主幹教諭で教務主任の杉野千晶先生は説明する。

「振り返りの観点の中でも、特に大切にしているのは、『②このように考えたらできた』という見方・考え方につながる項目です。前時のスタディ・ログと比較することで、『友だちの考えを取り入れたら新しいアイデアが生まれた』など、その日の授業で得られた学びのよさや自分の成長を自覚できます。さらに、次の学

お話を聞いた方



校長
梶原秀昭
かじわら・ひであき
同校に赴任して2年目。



主幹教諭・教務主任
杉野千晶
すぎの・ちあき
同校に赴任して2年目。



1学年担任
小野彰子
おの・あきこ
同校に赴任して3年目。

※プロフィールは、取材時（2022年3月）のものです。

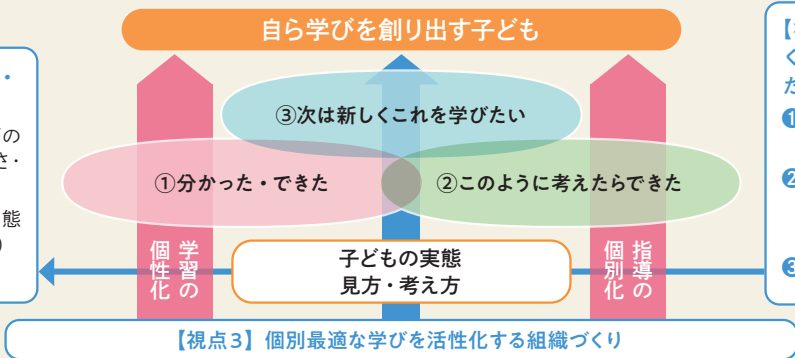
びの方向性を見だし、これから始まる授業での学び方を選択していけるようになると思っています」

子どもたちが3つの観点で振り返りをしやすいように、教員も板書や発問の工夫をしている。

「例えば、授業記録として保存される板書では、『②このように考えたらできた』という見方・考え方につな

図1 研究構想図

【視点1】 TOHOスタディ・ログの活用
 子ども自身の活用（学びの方向の決定、学びのよさ・自己変容の自覚）
 教員の活用（子どもの実態把握、達成度の把握など）
 教員間の活用



【視点2】 単元・題材を貫く見方・考え方を働かせるための教員の支援
 ①見方・考え方を明らかにする教材研究
 ②見方・考え方を適切に働かせる単元指導計画の作成
 ③1単位時間の学習過程

※東峰学園の提供資料を基に編集部で作成。

がるキーワードは、黄色のチョークで書くようにしています」(杉野先生)
 毎時の板書画像の撮影は、低学年や学習上の困難を抱える子どもなど、板書をノートに書き写すことが難しい子どもにとっても、学習内容の整理につながっているという。

板書の時間を、個別指導や思考・表現の時間に転化

「TOHOスタディ・ログ」から過去の授業記録をいつでも見返せるた

め、各授業が活性化・効率化し、指導の個別化が進んだと、1学年担任の小野彰子先生は説明する。

「紙のノートやプリントとは異なり、子どもが忘れてたり紛失したりすることはありません。授業中すぐに過去の板書を参照できるので、私が過去の学習内容をもう一度板書する時間も省略できます。その分、理解が不十分な子どもへの個別指導に時間をかけられるようになりました。また、板書を書き写す時間が減った代わりに、自分で考えたことを書く

時間や、話し合いの時間を増やすことができます」

このような授業の変化は子どもたちの思考力や表現力の伸長にもよい影響をもたらし、記述式のテストでも無回答が減るなどの効果が表れているという。

指導の個別化の面では、タブレット端末を介して、子どもたち一人ひとりの学びの様子を見取りやすくなったことも見逃せない。

「授業支援ソフトを使うと、一人ひとりの活動状況をリアルタイムに観

図2 「自分BOX」に保存していく「TOHOスタディ・ログ」の例

子どもが記録した日々の授業の学習履歴「TOHOスタディ・ログ」は、「自分BOX」の中の教科・領域別フォルダに、時系列で保存していく。

※東峰学園の提供資料を基に編集部で作成。

板書の画像データや3つの観点での振り返りなどを、「ミラישード」(*1)の授業支援ソフト「オクリンク」を使って、該当の「自分BOX」に保存していく。

*1 一斉学習・協働学習・個別学習で活用できる複数のアプリケーションで構成された、ベネッセのオールインワンソフト。

察できるので、思考が停滞している子どもや、全体に共有したいユニークな考えにたどり着いた子どもなどを見逃すことがなくなりました。また、形成的評価もしやすくなりました」(小野先生)

授業後の振り返りで◎をつけなかった子どもには、家庭学習用のプリントを渡したり、次の授業で重点的に声をかけたりして個別にフォローしている。また、これまで子どもの学習状況を把握するには、ノートを回収して職員室でチェックし、下校時まで返却しなければならなかったが、今は授業支援ソフトです

ぐに確認できるので、負担は軽減したという。

さらに、2年生以上は振り返りの内容を子ども自身が記述するため、より詳細に一人ひとりの学習状況を把握でき、授業計画や使用する教材の見直しにつなげやすくなっている。

「正直、私自身がICTが苦手で、授業支援ソフトを使い始めた当初は準備に時間がかかったこともありましたが、すぐに慣れました。ICTを使うことで、子ども同士の話し合いや1人での熟考など、私が大切にしてきた活動の時間をしっかりと確保できるようになりました(授業リポー

ト参照)」(小野先生)

習熟度別授業や特別支援での個別指導にもICTは有効

指導の個別化を推進するため、3年生以上の算数・数学科の授業では、単元の導入チェックテストの結果によって、「すいすいコース」「こつこつコース」に分ける習熟度別授業も実施している。「こつこつコース」では、みんなで考える時間を多くし、「すいすいコース」では、デジタルドリルを活用して、一人ひとりの進度に応じたドリル演習に取り組む時間を

授業レポート

1年生 国語科(作文)

「メモをもとに『思い出アルバム(作文)』を書こう」

1 本時の見通しの確認



前時に1年間を振り返って付せんに書いたメモの文を、並べ替えて、文章の組み立てを考えることを確認した。

2 文章の構成を考える



教員が端末に入力したメモを各自で並べ替えた後、2人1組で結果と理由を発表し合い、クラス全体でも確認した。

3 学習履歴を参照する



並べ方が分からない子どもには、前時の内容を「自分BOX」から参照するように机間指導で声をかけた。

4 作文を組み立てる



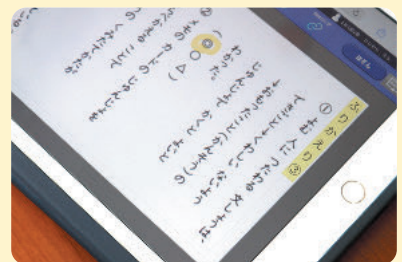
全員で確認した文の並べ方のポイントをプリントに書き写した後、自分の付せんに並べ替えて、作文を組み立てた。

5 学習の成果を撮影、保存



プリントの内容と、板書を撮影し、授業記録として「自分BOX」に保存した。

6 本時を振り返る



3つの観点で振り返り、1年生は◎△の選択式で自分の学びを評価。◎印以外の子どもには個別に声をかけた。

増やしている。また、「こつこつコース」には、中学部の数学科の教員がチーム・ティーチングで参加するなど、小中一貫校のメリットを生かし、小・中学校間の接続も強化している。

同校の特別支援学級でも、ICTを様々な活用している。集団行動が苦手や欠席が多かった子どもが運動会に参加するにあたっては、「TOHOスタディ・ログ」に蓄積してきたそれまでのダンスの練習動画を見せながら、当日の流れを説明した。

「その子は、自宅でも練習動画を見ながら練習したそうで、本番ではみんなと一緒に練習してきたかのように、とても生き生きとした様子で活動に参加していました」(杉野先生)

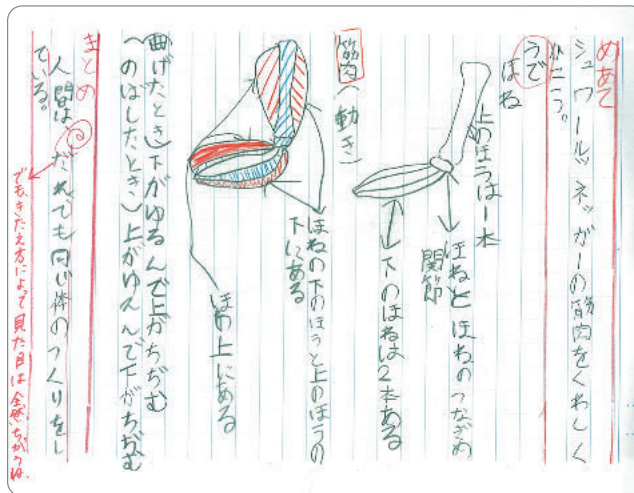
単元の終わりのテストでも、文字の読みに困難を抱える子どものために、担任が問題を読み上げる動画を作成したところ、紙のテストでは見られないような積極的な姿勢で問題を解いていったという。

「ICTを使うことで、教員は個別指導が必要な子どもへのケアをより丁寧に行えるようになりました。何より、子どもが自分の学びの検証に参加するようになったことで、苦手分野の克服のため、家庭学習に主体的に取り組むなど、もっとできるようになりたい、変わりたいという気持ちを具体的な行動につなげられるようになりました」(杉野先生)

学びの履歴から子ども自身が自分に合った次の学びを発見

学習の個性化についても、今後、「TOHOスタディ・ログ」がその実現に大きく寄与するだろうと同校は期待を寄せる。同校では、2022年度から、1年生から9年生まで、教科・単元を超えて自分の興味・関心のあつテーマを夏季休業中に深める「1

図3 「チャレンジノート」の例



4年生のある児童は、理科や体育科の学びを振り返る中で「筋肉」に関心を抱き、自らの探究テーマとして、レポートにまとめた。

人1研究」をスタートさせるが、授業の振り返りで残している「③次は新しくこれを学びたい」の内容は、「1人1研究」のテーマ設定に役立つと考えている。

既に、2021年度にも、「TOHOスタディ・ログ」を活用した自主学習を試行。子どもたちは、自分の課題や興味・関心に合わせて、ドリル演習をしたり、探究学習に取り組んだりして、その成果を自学用の「チャレンジノート」にまとめた。

「ある4年生の子どもは、理科の授業をきっかけに、筋肉の働きに興味を持ち、身体のどこにどんな種類の筋肉があるのかを調べて、『チャレンジノート』にまとめました(図3)。『自分BOX』に学びの記録を保存していくことで、次の課題や疑問が見つかりやすくなること、そして、より深く考えられるようになることを、その子が私たちに教えてくれました」(杉野先生)

教員にとっての目の下の課題は、毎時の授業の振り返りに一定の時間がかかることだ。タブレット端末は家庭に持ち帰らせているので、振り返りは家庭学習とすることで、授業中は話し合いの時間をさらに増やすことを一部の学年で既に試行している。

「TOHOスタディ・ログ」を活用した個別最適な学びへの挑戦は試行錯誤の連続だが、教育委員会は授業支援ソフトの導入などに関する学校現場の要望を「まずはやってみよう」と常に後押ししてくれるため、教員は子どもの実態に即したチャレンジができていくと梶原秀昭校長は説明する。

「真の個別最適な学びは、教員があれこれと支援を徹底することだけではなく、子どもに学びを委ねることで実現すると考えています。子どもたちが『TOHOスタディ・ログ』を活用して、次の学びを自分で創っていくことが理想です」

新しい学びの種である「TOHOスタディ・ログ」を子どもと一緒に見ながら、「ここを深めたら面白そうだね」と声をかけ、支えていくことが、目指す教員像の1つだと梶原校長は語る。

「インターネットを介して容易に世界とつながる時代ですが、答えが1つではない課題も山積しています。検索で安易に答えを探すのではなく、自分や友だちの学びの履歴の中から、自分なりの答えやあるべき未来像を見いだす力を将来に向けて育てていきたいです」